The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	英国外交官の黄禍論小説 ： アシュトン=ガトキンの『キモノ』（1921）と裕仁親王の訪英
Author(s)	橋本, 順光
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2017, 57, p. 1-19
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61371
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

英国外交官の黄禍論小説

―アシュトン＝ガトキンの『キモノ』（1921）と裕仁親王の訪英

橋 本 順 光

はじめに　忘れられたベストセラー小説『キモノ』（1921）

1921 年 5 月の英国で、ジョン・パリスの『キモノ』という小説が刊行された[1)]。作者は英国外務省に勤務し、日本にも駐在していたフランク・T・A・アシュトン＝ガトキン（以降は、ガトキンと表記）。英国貴族の男性と裕福な日本人女性が、新婚旅行で日本を訪れ、英国で思い描いていた幻想の日本とはほど遠い現実に幻滅する物語である。二人の結婚は、小説の冒頭で駐英大使のサイトウ伯爵が祝辞のなかで「日英同盟の生きた象徴」と述べる場面があるなど、あからさまに日英関係の比喩として読まれることを意図している[2)]。それゆえ『キモノ』という題名が示唆するように、その華やかな衣装とその下に隠された「吉原」での人身売買といった醜い現実を対比する露悪趣味的な物語は、日英同盟存続の是非をめぐって両国で議論が高まっていた時期だけに、多くの人々の関心を引きつけ、版を重ねた。刊行された 5 月には、皇太子時代の昭和天皇が初めての外遊で英国を公式訪問し、その約半年後の 11 月には、日英同盟の更新をしないよう決定することになるワシントン会議が開催されるという頃のことである。後述するように、ガトキンはそのいずれにも関わっていた。日本語ができるということで皇太子ともっとも親しく会話した一人であり、ワシントン会議では英国代表団の一員として参加したのである。いうまでもなく、ガトキンは日英同盟の存続に否定的であり、日本の帝国主義と軍国主義は英国の深刻な脅威になると考えていた。

おそらくはガトキンと出版社の狙い通り、『キモノ』は刊行まもなく再版となり、わずか 2 年で 17 刷を数えた。アメリカの出版社が日本では発禁となったという広告を出したことも手伝って、広く英語圏でも一大ベストセラーとなった。当然、世界中で翻訳されることと

---

1) John Paris, *Kimono* (London: Collin's, 1921). 初版が 5 月刊行というのは、1922 年の同社第 14 版に記載のある各版の刊行時期による。

2) John Paris, *Kimono* (Harmondsworth: Penguin Books, 1947), p. 17. 以降、同書からの引用は本文中にページ数のみ記す。

なる。正確な書誌は不明ながら、ガトキンが記すところによれば、日本語、ドイツ語、フランス語、オランダ語、ポーランド語、チェコ語、スウェーデン語、デンマーク語、フィンランド語と、9カ国もの言語で翻訳されたという[3)]。さらに1947年には古典的小説の殿堂ともいうべきペンギン・ブックスに収録されている。『キモノ』の後もガトキンは、ジョン・パリスの筆名で『サヨナラ』(1924)、『バンザイ』(1926)、『マツ』(1932)といった日本を題材にした小説を出版したが、売り上げの点でも内容の点でも第一作に及ぶことはついになかった。ジョン・パリスとしての作家活動期間は、『キモノ』から『マツ』までの約12年間ということになる。

日本では「排日小説」として非難されつつも話題となり、奇しくも日英同盟が失効した直後の1923年8月に若柳長清による翻訳『きもの』が刊行されている。ただし、やや誤記と誤解が散見され、一冊に収めるためもあるだろうが、細かな省略が目立ち、厳密な意味での全訳とはいうことができない。なお1924年4月17日付けの読売新聞の「よみうり抄」によれば、「川端康成氏　ジョン・パリスの「きもの」の姉妹篇『さようなら』を訳了春陽堂から近刊」とある。版権取得から考えて二社で同時進行していたとは考えにくく、下訳を川端名で出版する噂か企画があったのかもしれないが実現することはなく、『サヨナラ』は、『きもの』と同じ訳者と出版社により、5月に『さよなら』として刊行されている。両者ともに出版からしばらくは版を重ねたが、その後、復刊も新訳も出ることなく、忘れ去られることとなった。

英語圏でも事情は似ており、これまで『キモノ』はほとんど注目されることがなかった。日英交流史の大家であるイアン・ニッシュが、ガトキンについてその生涯と事績を満遍なくまとめてはいるが、作家としての側面はガトキン自身の記述にほぼ全面的に依拠しているだけでなく、『キモノ』の刊行時期を1921年の夏として、皇太子が英国を去った後であると記すなど、若干、事実関係の誤記が見られる[4)]。以下、本論では、『キモノ』を19世紀末からの黄禍論小説の系譜のなかで位置づけ、これまで指摘がなかったプロパガンダとしての側面と日本での受容について簡単な素描を試みたい。

---

3) Ashton=Gwatkin, 'The Life and Times of John Paris', *Bulletin of the Japan Society of London*, 21 (1957 February), p. 14.

4) イアン・ニッシュ「フランク・アシュトン・グウォトキン」、イアン・ニッシュ編『英国と日本——日英交流人物列伝』(博文館新社、2002)所収のたとえばp. 239、p. 245など。また羽田美也子「ジョン・パリス作『キモノ』——最も物議を醸したジャポニズム小説——」『国際文化表現研究』3(2007)も、ニッシュが引用するガトキンの記事に多くを依拠している。

黄禍論小説としての『キモノ』

最初に『キモノ』の物語を紹介しておこう。いみじくも小説の冒頭は「結婚」という単語から始まり、「最良のプロパガンダ」という言葉で締めくくられる。最初に前述のサイトウ駐英大使が出席する結婚式の場面がすえられ、すべての黒幕であることが示唆されるサイトウ伯爵が、アサコに語る「とにかく生活を楽しんで、幸福な毎日を送ることだ。それが最良のプロパガンダなんだよ」（p.302）という台詞で最後となるのである。第一章のタイトルは「日英の結婚」、最終章は「レディ・ブランダン」である。つまり、アサコはサイトウの思惑通りに、英国の貴族と結婚し、紆余曲折の末、貴族夫人におさまる。そのように英国で貴族になることで「日本人が劣等ではないこと」が周知されるので、婚姻関係さえ続いてくれれば、夫不在でもかまわないという言外の意図が示唆されているといえるだろう。日本の黒い経歴と側面とを覆いかくすためだけに英国と同盟を結んでいるかのように描くことで、読者に反感を引き起こそうとしているわけである。

このことは1913年から翌年の第一次世界大戦勃発後の年末までという、刊行当時より約8年前の世界が舞台に選ばれていることとも重なり合う。二人は新婚旅行でヨーロッパを周遊したあとエジプトを訪れ、そのまま日本へと足を伸ばすことを決める。妻のアサコは欧州で教育を受けたため、日本も日本語も知らないのだが、南仏の海岸での海水浴の際に、人魚のような肢体を誇示する水着姿の西洋人女性のなかで自分の肉体が劣っていることを恥じて、キモノ姿で登場する。周囲の期待に反して結婚式にもキモノを着ることがなかったアサコは、ここで自主的にやむを得ずキモノをまとうのである。不都合な事実を覆い隠すためのキモノという本書の主題が、最初に示唆される象徴的な個所ともいえるだろう。ちょうど1900年代は英国でもフランスでも、キモノがガウンやドレスとして注目された一方、刊行当時の1920年代には安価ながら粗悪な日本製があふれて、キモノ自体の流行は退潮した頃のことである[5)]。

こうして、アサコはキモノを身につけて後、エジプトのルクソールで吸い込んだ東洋の香りに刺激され、あたかも帰巣本能に目覚めたかのように、まだ見ぬ故郷を訪問したいという欲望に突き動かされることになる。アサコを日本へ連れて行くと、ちょうどペットの動物が野性に帰るように、潜伏している東洋的な性格が覚醒するのではないかと、周囲の人間はジェフリーに警告する。たしかに日本への旅で二人の夫婦は、日本と英国との間には埋めようがない断絶があることを思い知らされることになる。二人の結婚の陰画ともいうべき存在として、「日英混血児」のヤエが、滞在する日本で二人の関係をかき乱すのである。ジョフリー

5）詳細は拙稿「日露戦争期の英国における武士道と柔術の流行」『阪大比較文学』7（2013）、及び「2011年度第五回例会報告」『ジャポニスム研究』32（2012）を参照。

に横恋慕したヤエは、拒絶された腹いせに、アサコ一族の財産の出所は吉原の遊郭であることを暴露し、一方、アサコは、夫がヤエと密通していると密告を受け、二人の夫婦関係は解消となってしまうのである。

しかし、一人、帰国の船に乗ったジョフリーは、第一次世界大戦勃発のため、そのままフランスで従軍することになり、苦しい戦地での不安から再びアサコへの求婚を書き送る。その手紙に心動かされたアサコは、愛想がつきた日本を離れる決心をし、貴族夫人として帰国するのを決意するのである。この終幕は、ちょうどクリスマスの前で、フランスで従軍しているジョフリーは、多くの部下や友人が戦死していることを注記している。当時の読者は、この戦争がクリスマス前に終わるどころか4年も続き、ジョフリーのような、人を疑うことを知らない多くの貴族が戦死し、一方で、日本が特需ともいえる景気にわいて国力を躍進したことを容易に想起したことだろう。はっきりとは記されていないが、アサコは英国に渡って、ジョフリーの死後、レディ・ブランダンとして、遺産を相続することが示唆されているのである。この御家乗っ取りにも似た結婚の末路は、当然ながら、日英同盟の未来としても描かれるのである。サイトウ伯爵は、19世紀末から英国で繰り返されてきた典型的ともいえる黄禍論や黄禍論小説そのままに、アサコに以下のような予言を語っている。

> 「この戦争で英国は弱体化し、日本が急成長するだろう。世界は大きく変化するだろうし、最大の変化はアジアに起きるはずだ。すでにアジアの人々は、なぜ白人がいつまでも自分たちを支配しているのかと疑問の声を上げている（中略）。そうして白人がアジアから追い出されたら、日本は本当に強くなる。長男の英国は「インキョ」して、次男の日本が家のことを切り盛りするようになるんじゃないか。アサチャン、君が生きているあいだにその日が来るかもしれないよ。すくなくとも君の子供たちは確実に目にするはずだ。」（301）

サイトウは冒頭で英国人にみせた態度とは打って変わって、日英同盟を男女の結婚ではなく、長男と次男という兄弟の関係としてとらえている。これは日本側が、日英同盟を上下関係が前提となった結婚ではなく、対等な友情として表象しようとした事情をふまえてのことかもしれない。そのようなサイトウにとって、英国貴族の夫人となり、その財産と跡継ぎに影響を行使できるアサコは、英国に変わって帝国と世界を支配する日本の似姿にもなるだろう。そもそもアサコの名字はフジナミである。ロティの「お菊さん」のように、ジャポニスム小説で定番の固有名詞が漢字でどのような意味をもつのかについての説明はないが、富士･波･朝をもりこんだフジナミ・アサコは、あたかも北斎の「神奈川沖浪裏」に旭日を付け加えた印象があり、日本を象徴していることはいうまでもないだろう（たとえ藤であったとしても、

それは日本の符丁としてジャポニスムの工芸や小説では定番の小道具である）。アサコの母の旧姓はヤマガタであり、フジナミ一族の右腕がイトウにタナカというのも、たぶんに歴代首相の名を意識してのことであろう。そのように考えるならば、近眼で白髪の小柄な男として描かれたサイトウについても、朝鮮総督を勤めた英国通の斎藤実をガトキンはどこかでモデルとして意識していたのかもしれない。

日本の国際的地位を引き上げ、日本人への人種的偏見を消し去るため、吉原での収益で得た財産から日本人女性をヨーロッパで教育を受けさせ、英国貴族の一家へと送り込む。およそ荒唐無稽な計画ではあるが、こうした設定は、19 世紀末からの黄禍論ないし東洋趣味の物語という大きな文脈と系譜に『キモノ』が位置づけられることを示している。日英同盟の存続という政治的な観点に加えて、こうした枠組みゆえに、日本という見慣れぬ世界の詳細な記述が引き立ち、広く英国で受け入れられたというべきだろう。その一つの傍証となるのが、作家ジョセフ・コンラッドとガトキンとの面会である。コンラッドは、彼の助手を勤めていた友人のリカルド・カールに宛てた 1923 年 12 月 17 日付の書簡で、「ガトキンには会ったか？　彼の小説がよく売れるのは私にはよく分かる」と書き送り、「送ろうか、それとも彼からもらった？」とを聞いている[6)]。時期からいって、この小説が『キモノ』のことであり、それが数年で 20 近い版を重ねたことを指しているのはほぼ間違いあるまい。ガトキンの回想によれば、おそらくこのときのことだろう、コンラッドはガトキンに対して「観察眼に優れており、だから（お世辞ではなく）『キモノ』のような本には売れるだけの内容がある」と褒めそやしたという[7)]。

コンラッドがガトキンの『キモノ』を知っており、面会までしたというのは、『闇の奥』に始まるポストコロニアル小説の著者として揺るぎない地位を占めている現代の眼から見ると、意外な感がある。しかし、当時のコンラッドは、なによりも異国趣味あふれる小説の書き手として知られていた。コンラッドは、たとえば友人であるヒュー・クリフォードとともにマレーを舞台にした小説家としてひとくくりにされていたのである。クリフォードは、英領マラヤに勤務した植民地行政官であり、現役官僚作家という点でガトキンとよく似ていた。『キモノ』を多く売り上げたという話題だけでなく、こうした親近感もコンラッドが面会に応じた理由の一つであろうし、ひょっとするとそこにはクリフォードからの紹介か伝手でもあったのかもしれない。

そうした面会の経緯はともかく、特にハイブリッドな存在への好奇心という主題の点で、ガトキンの『キモノ』はコンラッドやクリフォードの小説と高い親和性があった。そもそも

6）*The Collected Letters of Joseph Conrad*, vol. 8 (Cambridge: Cambridge University Press, 2007), p. 249.

7）Ashton=Gwatkin, ‘The Life and Times of John Paris’, p. 13.

コンラッドによる小説第一作である『オールメイヤーの愚行（*Almayer's Folly*）』（1895）は、『キモノ』同様に異人種間結婚の失敗を描いたものである。物語を簡単に記せば、オールメイヤーというオランダ人入植者が、ボルネオでマレーの女性と結婚し、ニーナという娘が生まれる。オールメイヤーはニーナに西洋風の教育を受けさせ、西洋人となることを望むが、ニーナはそれを拒絶し、母とともにすっかり「現地化」してしまう。こうしてあらゆる入植に失敗し、絶望したオールメイヤーは、題名の由来である未完成のまま荒れ果てた邸宅で虚しくアヘン中毒となって死ぬというものである。このニーナの造形は、たぶんに『キモノ』におけるヤエに引き継がれているといえるだろう。ヤエもまた、ヨーロッパとアジアの人種が入り交じったという意味で、当時でいう「ユーラシアン」であり、あたかもどこかが劣った矛盾の存在としてみなされ、性的に奔放で、男性たちを籠絡し、破滅させることに喜びを感じるような女性である。つまるところヤエは日英同盟の落とし子を象徴し、ジェフリーとアサコの間の子供も、同様の存在となることを示唆している。そもそも世紀転換期の英国では、『キモノ』でジェフリーが「優秀な若手官僚がインドで現地の女性と結婚して、前途のある職を棒に振った」（69）ことを想起するように、植民地女性と親密な関係になることは忌避され、非ヨーロッパ系の女性との結婚もほぼ、避けられていた。キプリングやコンラッド、それにクリフォードらの小説を意図してのことだろう、「「混血児」という苦々しい単語は、あくまで扇情的な小説のなかでしか聞かない」（69）と思っていたジェフリーは、日本で自分もまたそれらの小説が描く社会から望まれない結婚をし、自分の子供が同じ烙印を押されることに気づくのである。

さらに20世紀初頭までは、こうした肉体のハイブリッドと同じ現象が、頭脳のハイブリッドにおいても起こると考えられていた。コンラッドの友人であるヒュー・クリフォードの小説『サレエ（*Saleh*）』（1908）は、いわばオールメイヤーとは逆にマレーから英国へ来た男の物語であるが、人種衝突の主題はもっとあからさまに押し出されている。サレエというマレーの貴族は英国の大学へ留学し、西洋的な教育と環境に適応しようと苦闘する。しかし、もともとのマレー的な気質との対立に精神の均衡が保てなくなり、ついに、当時、マレー人特有のものと信じられていたアモク（amok）という錯乱状態に陥り、暴れ狂って自滅するのである。アモクは、今日からみればきわめて人種差別的な偏見でしかないが、普段、おだやかな気質とうらはらに、マレーの人々は、あたかも暴発するように発作的に、クリスと呼ばれる刀をもって手当たり次第に人々に切りつけて暴走することがあると考えられていた。まさにクリフォードは、その著作を通じてアモクを広く英語に知らしめた中心人物であったのである[8)]。

8）アモクをめぐるクリフォードとコンラッドの対比については、Asako Nakai, *The English Book and its Marginalia: Colonial-postcolonial Literatures After Heart of darkness* (Amsterdam: Rodopi) を参照。

こうしたアモク神話はおよそ日本とは無縁のように思えるが、19 世紀このかた日本人の人種的起源をめぐってしばしば登場するマレー起源説は、実のところアモクを暗黙のうちに前提としている。たとえば『キモノ』ではハーンがしばしば言及され、『心』（1896）ほかその著作を読んだジェフリーは来日してすっかり幻滅し、ハーンを「骨の髄まで虚言癖がある」とまでいうのだが、そのハーンこそは、こうした日本人マレー起源説を奉じていた一人である。その『東の国から』（1895）に収録された「生と死の断片」にて、おそらくは日清戦争を念頭においてであろう、日本では家宝が幾重もの布に包まれるように、日本人の精神もまた温和で礼儀正しく忍耐強くみえる文明化の衣装に隠されてはいるが、その肌触りのよい布の核には「鉄のように固い原始的粘土が、おそらくはモンゴルの気概とマレーの危険でしなやかな粘土とが、混じり合って残っている」と注記している[9)]。この「危険でしなやかな粘土」というのは、アモクで用いられる短刀のクリスをおそらくは示唆していると考えられる。またアルジャーノン・B・ミットフォードもまた義和団事件の鎮圧に際して日本軍の貢献が高く評価された論調に水をさし、1900 年 7 月 12 日付けの『タイムズ』紙には「日本と中国の危機」と題した投書を掲載している。ミットフォードは、たとえ日本が文明化しているかにみえても、わずか数十年前の攘夷運動で示した血なまぐさい外国人排斥を忘れてはならず、日本人の心性にはそうした「ヤマトダマシイという旧日本の精神」が休火山のように底に隠れているだけであることを忠告し、ドイツ皇帝が示唆したような日本が中国と連携して西洋列強に立ち向かう黄禍の危険性を警告している[10)]。ハーンやミットフォードらは、一見、おだやかな日本人の微笑と柔和な表情の下にはマレー的な激情の気質が隠れており、アモクにも似た暴走により、共倒れを辞さない暗殺や切腹などの自死を引き起こすと示唆しているのである。

このような文脈を考慮すれば、『キモノ』において、日本から隔離されて西欧で教育を受けたため日本語を理解しないアサコは、クリフォードの描くようなハイブリッドなキャラクターの系譜にたっていることは明白だろう。したがって、日本に行けばアサコの東洋的な性格が回帰するのではないかという、『キモノ』の冒頭で登場する疑念は、当時の読者なら多かれ少なかれ連想した展開だったのである。たしかに『キモノ』では、アサコがそのような発作的な激情に駆られる場面は登場しない。しかし、慇懃で西洋かぶれにしか見えなかった男の一人が豹変して、急遽、アサコに襲い掛かって刃傷沙汰になるところは、従来のアモク

9) Lafcadio Hearn, *Out of the East* (Boston: Houghton Mifflin, 1895), pp. 149–150.

10) ミットフォードの投書は、日本政府でも警戒されたことが外交文書に残っている。大谷正『近代日本の対外宣伝』（研文出版、1994）pp. 323–325. 後にミットフォードは、ガーター勲章授与のために来日したが、当然のことながら、その際には持論をおくびにも出さず日英親善の報告書 *Garter Mission to Japan*（1906）を刊行し、その後、投書で展開した日中同盟への警戒については *Japan's Inheritance*（1913）で詳述した。前者は『英国貴族の見た明治日本』と題されて刊行されたが、後者はほとんど注目されることがない。詳しくは、拙編著、*Yellow Peril, a Collection of Historical Sources*, 4vols. (Tokyo: Edition Synapse, 2012) とその解説を参照。

の印象を日本の舞台に巧みに適応させた場面といえるだろう。またアサコ自身も西洋人女性に比べて自身の貧弱な肉体に劣等感を抱いていることが明記され、かといって日本社会にはなじめず、日本人についても得体のしれない異形という印象しか抱けないまま「どれだけ努力しても日本を好きにはなれそうにありません」(302) という言葉を残して英国へ戻る。『キモノ』では冒頭と末尾で、日本の植物は日本という庭でしか生きていけないこと、逆に英国から持ち帰った薔薇は日本の土地で日本化することに抗っていることをサイトウ伯爵が述べ、ちょうど中国の纏足と同じく自然を矯正する盆栽の描写とあいまって、アサコもまたそのような存在であることが示唆されている。つまり、どちらにも帰属できないアサコは、アモクの発作に襲われるサレエと同じく、そして「混血児」のヤエと同様に生物的な矛盾であるかのような印象を与えて小説は閉じられるのである。

19 世紀後半の英国では、インドやマレーに代表される東洋人のステレオタイプが主流ななか、多分に誤解を含むとはいえ、例外的に肯定的に描かれたのが日本だった。そこでは日本が、従来の美術と工芸の境界を撹乱するゆえに「美の国」として理想化して描かれ、折からの女権拡大運動の高まりのなか英国人女性への批判という意味もあって、ミュージカルの『ゲイシャ』(1896) のように男性と家庭に献身的な日本人女性が過剰に評価されたのである。こうした 19 世紀的なコミカルで美的な日本像を意図的に転覆させる仕掛けが、『キモノ』にはしばしば見られる。ジェフリーの日本の知識がほとんどミュージカル『ミカド』(1885) の域を出ず、アサコを『ミカド』に登場する日本娘の名前で、「おいしい」の幼児語でもある「ヤムヤム」(29) と呼んだり、あるいは「僕の小さなゲイシャ」(30) と呼びかけたりするのは、その一例だろう。日本人男性は困惑するといつも微笑を浮かべてごまかそうとするとは、『キモノ』で繰り返し登場する表現であるが、これはハーンの「日本人の微笑」(1893) を意識してのことであろうし、実際、ハーンを読んだジェフリーは、自分がアヘンでも飲んでいるかのように描かれた、およそこの世の物と思えない日本に極めて批判的となる (30-1)。そもそも「ゲイシャ」という言葉が英国に流布したのは、1896 年に上演されて世界的にヒットしたミュージカル『ゲイシャ』以降のことだが、そこで描かれているように、ジェフリーはゲイシャを陽気な茶屋のエンターテイナーくらいにしか思っていない。『ゲイシャ』はハーンが広めた日本にはキスがないという神話をさらに補強したが、『キモノ』でもガトキンはその神話を踏襲しつつ、そこからそもそも西欧のラブに相当する概念がないことを導き出す (199)。『ゲイシャ』はまた、そのヒットナンバーで「チョンキナ」という言葉を広めたが、この言葉は『キモノ』でも対照的な形で登場している。もともとチョンキナは条約開港地で外国人向けに好んで踊られた野球拳、ないしそれにかこつけたストリップティーズであるが、ヴィクトリア朝らしいというべきか、『ゲイシャ』ではあくまでその際の「チョンキナ」という囃子声が転用されるのみで、その特別な踊りの内容自体は明示されることが

なかった[11]。この名物のチョンキナ踊りの「実物」を、ジェフリーは悪友に誘われて長崎で見ることになり、その「ギリシア的美の基準を完膚なきまでに否定した姿」（62）に幻滅し、アサコ自身にさえも違和感を抱くようになるのである。吉原で日本での「ゲイシャ」がどのようなものかを目の当たりにして、さらにジェフリーが衝撃を受けることはいうまでもないだろう。この場面は、いわば『キモノ』の主題を要約するものといえる。つまり、19 世紀から続く広義の黄禍論的な主題を継承すると同時に、ジャポニスム的な日本像を、表層的な「キモノ」としてはぎとり、その裏にある醜悪な実態をさらけだすのである。

『キモノ』の反日プロパガンダとしての側面と日本での反応

このようにジャポニスム的な幻想の日本を用意周到に否定し、日本の実態なるものを詳細に説得力ある形で描き込むだけの知識と筆力のあったガトキンはいったいどのような人物だったのか。その経歴を簡単に振り返っておこう。生まれたのは 1889 年であり、没年は 1976 年と、外交官として日本やソ連など各地を激務で転々としながら、旺盛な執筆活動をこなしたにしては長寿に恵まれたといえるだろう（図 1）。オックスフォードのベリオル・カレッジから外務省に入り、1913 年から 5 年間、日本の英国領事館に勤務した。ベリオル・カレッジでは松平慶民と親しかったという。松平は、1912 年から宮内省に勤務したので、昭和天皇とガトキンの関係は、松平がどこかで仲介したのかもしれない。日本勤務後にはシンガポールに 1 年ほど駐在し、英国に帰国したのは、1919 年の秋のことである。ガトキンによれば、『キモノ』の草稿は横浜にいた 1917 年から書き始め、1919 年にシンガポールからの帰路の船中で書き上げたという[12]。帰国後は外務省の極東部門に勤務し、東京駐在の頃から繰り返していた日本の植民地主義に対しての警鐘を、とりわけ朝鮮半島の独立運動弾圧を受けて、1920 年になっていっそう強めている。その一つでは、日本の「武士道プロパガンダ」をまやかしと断じ日本政府が植民地において行っている弾圧は見過ごすべきでなく、とりわけ満州に居住す

図 1　ペンギン版『キモノ』掲載のガトキン近影

11）詳細は拙稿「茶屋の天使――英国世紀末のオペレッタ『ゲイシャ』（1896）とその歴史的文脈――」『ジャポニスム研究』23（2003）を参照。

12）Ashton=Gwatkin, ‘The Life and Times of John Paris’, p. 13.

る日本人の多くは性産業か麻薬産業に何らかの関わりがあるので注意が必要とまで報告している[13)]。こうした知見が、『キモノ』の吉原についての記述につながったことは想像に難くないだろう。一方、前述のように、1921年5月、皇太子時代の昭和天皇が渡英した際に、ガトキンは随行員を務めた。5月9日に戦艦鹿島がポーツマスに入港した際、「前在東京英国大使館書記官外務書記官」である「フランクT･A･アシュトンガトキン」が出迎えたとは、『昭和天皇実録』にある通りである[14)]。親日的な外交官として知られる英国のピゴットの自伝によれば、日本語が話せた彼とガトキンがもっとも親しく皇太子と会話したという[15)]。

冒頭でも触れたように、『キモノ』は皇太子の英国滞在時に刊行された。『キモノ』の広告や書評を調査したところ、すでに5月12日付けの『ノーザン・ホイッグ（*Northern Whig*）』に掲載があり、同23日にはスコットランドの『アバディーン・プレス（*Aberdeen Press and Journal*）』、同26日の『スコッツマン（*The Scotsman*）』などでの紹介が続いており、5月下旬にはイングランド全体に流通していたと考えられる。皇太子裕仁は、5月9日に入港後、ロンドンほかスコットランドを巡り、5月29日に再びポーツマス港を出発している。すでに多くの指摘があるように、皇太子の渡英は、対日感情の向上と日英同盟堅持の宣伝を兼ねていた。たとえば皇太子は、日本から英国までの間に寄港した港がみな事実上の英国領であり、まさに日が沈まない帝国であると同時に、それらの領土が徳治によって支配されていることに感銘を受けたと、いかにもな外交辞令をジブラルタルでの会見で答えている[16)]。つまり、5月に皇太子が日英親善のために英国を訪問中、随行した英国の官僚が匿名で反日英同盟という正反対の宣伝を行っていたことになる。

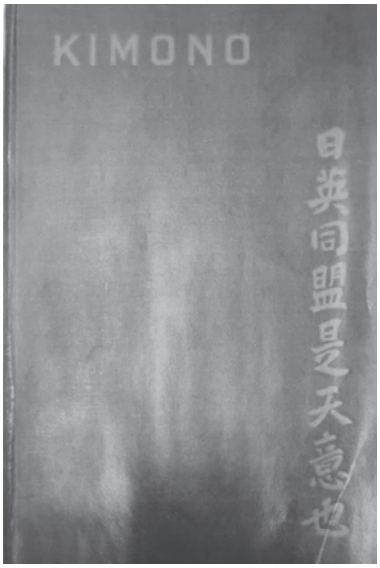
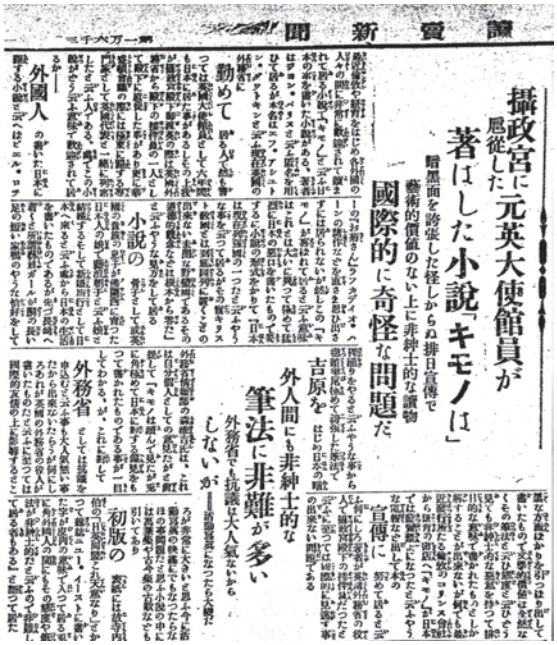


図2 「日英同盟是天意也」を印字した『キモノ』の初版

それでは『キモノ』の刊行は、皇太子訪問に合わせたガトキンの意図的な（反）宣伝活動なのだろうか。ガトキンの言を信じるならば、『キモノ』は1919年秋

13) FO/410/68, Memorandum respecting the Present Atrocities in Korea and Elsewhere (Dec. 1920) がその代表例である。
14)『昭和天皇実録』三巻（東京書籍、2015）p. 122.
15) Francis Stewart Gilderoy Piggott, *Broken Thread: an Autobiography* (London: Gale & Polden, 1950), p. 130.
16) この際に日本側が用意した原稿は、『昭和天皇実録』に和訳が掲載されているが、実際の英国の記事では、このような非公式な談話が掲載されている。詳細は、拙編著『欧州航路の文化誌』（青弓社、2017）所収の序論を参照。


讀賣新聞

攝政宮に
屈從した元英大使館員が
著はした小說「キモノは」
暗黑面を誇張した怪しからぬ排日宣傳で
藝術的價値のない上に非紳士的な讀物
國際的に奇怪な問題だ

外人間にも非紳士的な
筆法に非難が多い
外務省でも抗議は大人氣ないから
しないが

勤めて
小說の
外務省
吉原を
宣傳に
初版の

図３　『キモノ』に抗議した1922年9月14日付け読売新聞記事

図４　モーティマー・メンピスを表紙にした1922年版『キモノ』

には書き上げていたことになり、1年の推敲と調整の期間を考えても、刊行時期はかなり自由に決定できる余裕があったと考えられる。となると、日英同盟を更新すべきかどうかの議論が浮上してくる1921年において、ガトキンが絶好のタイミングを待ち構えていた可能性は十分に考えられよう。正式に皇太子の訪英が英国政府に通達されたのは、1921年の2月のことであり、すでに印刷時期を待ち構えている状態であったとすれば、まったく不可能とはいえまい。

その際にヒントとなるのが、初版の表紙である（図2）。1922年9月14日付けの読売新聞も報ずるように（図3）、そこには雑誌『新東洋（*New East*）』から転載された「日英同盟是天意也」という寺内正毅朝鮮総督の題字が、そのまま原文で転載されていた。『新東洋』とは英国が反独感情を煽り、日英同盟の堅持を宣伝するために1917年に創刊した日英両語並記の宣伝雑誌である[17]。『新東洋』は1918年には休刊となったが、この雑誌の製作にはガトキンも駆り出されていた。執筆者や協賛者として政治家や軍人はいうにおよばず、鈴木大拙や柳宗悦、バーナード・リーチなど錚々たる民間人も寄稿していた雑誌であり、そのなかからの一節をわざわざ日本語で表記したことになる。本文に表紙の題字についての解説はなく、

17）詳細は拙稿「日英における移動と衝突：柳、柳田、スコット、リーチの交錯の例から」『「世紀転換期の日英における移動と衝突――諜報と教育を中心に」報告・論文集』（大阪大学、2013）所収を参照のこと。

後の版では、たとえば訪日して多くのスケッチを残したモーティマー・メンピスによる桜と娘の挿絵といった、いかにも日本的なものに差し替えられている（図4）。メンピスについての説明は書中には見られないが、彼の1887年の展覧会での日本を題材にした作品については、ワイルドが「嘘の衰退（the Decay of Lying）」（1891）で、幻想の「日本」は日本にないのに見に行った例として暗に批判しており、この選択がガトキンの意図かどうかはともかく、従来の日本趣味との対比という点で皮肉が利いている。同じように、初版の「日英同盟是天意也」は、一見、日本趣味の延長にたつような錯覚を与える点で、同じ効果をもたらしていると考えられよう。しかも、まるで訪英している皇太子とその使節団の目を引くように、翻訳がないまま漢字で書かれ、一見、宣伝活動に役立つ書物かと思いきや、一読すれば、その後の日英親善活動に支障を来すような反感を買う内容が書かれているわけである。そもそも、この「日英同盟是天意也」と書かれた初版は、ごく初期に刊行されたもので、あまり出回っているものではない。前述の読売新聞の記者は、現物は確認しておらず、外務省情報部の森権吉から情報提供を受けてそのまま談話を記事にしている。そもそも外務省関係者でなければ、あの題字が『新東洋』からのものであることは気づかないであろうし、気づいたとすれば、もっぱら日本でしか流通していない雑誌からの引用ゆえに、『キモノ』の作者は同時期に日本に滞在していた英国人であり、ここまで日英親善に水をさすことを目的としている以上、英国の政府関係者ではないかと疑いの目を向けたことは確実だろう。ワシントン会議が終了し、日英同盟の廃棄が決定した2月以降に、この読売新聞の記事が掲載されたのは当然だとしても、なぜ9月になってのことなのかという疑問が次にわく。この一因として考えられるのは、同時期に米国でおきた発禁をめぐる騒動である。1922年に米国の『イヴニング・ワールド（*Evening World*）』に『キモノ』が転載された際、日本では発禁処分となったと広告で紹介された。これを見た在米日本総領事が、掲載紙の送付とともに内田康哉外務大臣に問い合わせ、そのような処置はなく、扇情的に販売を煽るためであろうとの回答が残っているのである。そしてその外交文書のファイルには上記読売新聞の記事もクリッピングされているのである[18]。

発禁騒動による『キモノ』への注目は日本の外国人社会にも波紋を呼び起こしたようだ。その『キモノ』をめぐるファイルにはヤエのモデル問題についての文書も収録されている。『キモノ』を邦訳した若柳は、その序文で「副主人公で、放縦そのものの様な混血児スミス・八重子は、日本にて相当に聞こえた某英国新聞記者のお嬢さんをモデルにとったもの」と記している[19]。これは、日本最初の国際結婚ともいわれるフランシス・ブリンクリー（Francis

18）「英文小説「キモノ」」レファレンスコード B03040653700、外務省外交史料館外務省記録1門　政治3類　宣伝1項　帝国新聞雑誌出版物等取締関係雑件　第五巻。

19）若柳長清『きもの』（京文社、1923）「序文」p. 2.　若柳の詳細は不明だが、p. 4の序文末尾によれば、

Brinkley）と田中安子のあいだに生まれた稲・ブリンクリーのことを指している。基本的に勤務地での事実婚には黙認しても、日本人女性との婚姻関係の認可を英国法に基づいて正式に申請した事例は前例がなく、その「私生子」の問題もあって、ブリンクリーの訴えが認められるまでには相当の紆余曲折と報道があった[20]。そしてこのブリンクリーは、しばしば日本政府の御用新聞と批判をあびた『ジャパン・ウィークリー・メール』紙の社主であり、その豊富な資産で日本美術の一大コレクターとしても名を馳せていた。都内の豪邸とそのテニス・コートでの優雅な生活と交友関係については、稲をモデルにした絹・ウィーラーという女性が登場する志賀直哉の「大津順吉」（1912）にも詳しい[21]。車夫が連想される Wheeler という単語を選んでいる点だけでも、志賀の反感が類推されるが、稲は長谷川時雨の『美人伝』（1918）で「ブリンクリー稲子」として登場するなど、つとに美人として有名で、ヤエほどではなくとも、さまざまな噂を立てられていた（図5）[22]。『キモノ』もまたそうした噂を利用しており、アイルランド系からスコットランド系と変更してはいるものの、とりわけ9章と16章とで、スミス一家のテニス・コートが英国人や富裕な日本人たちの社交場となっており、ヤエがいつも男性達に囲まれ、取り巻き同士での決闘があっただの、中には自殺するまで思い詰めた者がいただのといった噂に加えて、ヤエを魂のない吸血女か蛇女のように描いている。

図5　『美人伝』掲載の稲・ブリンクリー

ヤエの兄オーブリーもわずかではあるが登場しており、これも実在のジャック・ブリンクリーを指すと考えられ、ガトキンの反宣伝活動と関係がある。ジャックは1919年のジェイムズ・カズンズの来日後、その感化を受けて神智学協会に参加しているが、この協会はインドの独立運動を扇動するとして英国政府からつとに目を付けられていた。アイルランド系のカズンズも、インドに長く在住し、英国政府には強い反感を抱いており、その関係で日本滞在中は、黒龍会の編集する英文雑誌『エイジアン・レヴュー』にも関与していた。カズンズは、『新東洋』への投稿者を逆に神智学へと引き込む活動を行っており、その動向は日英の

若柳はこの翻訳を「宝塚線石橋の寓」にて仕上げたという。

20）詳細は嘉本伊都子『国際結婚の誕生』（新曜社、2001）を参照。

21）稲についての詳細は生井知子「稲・ブリンクリーのことなど」「志賀直哉全集月報21」（2001）を参照。ただし残念ながら『キモノ』のことは触れられていない。

22）その証左というべきか、国会図書館の蔵書では写真部分には切り取りがあって欠損しており、そのため図版として掲載しておいた。

官憲が監視していたため、こうした経緯もあってガトキンが意図的にブリンクリーに目を付けた可能性は高いといえるだろう[23]。このように『キモノ』のヤエが、稲・ブリンクリーを想起させることは明らかであるため、いわば反日英同盟の宣伝のために生け贄のように描かれた稲が、『キモノ』に対して反発を抱いたことは容易に予想できよう。実際、外務省のファイルには、『ジャパン・クロニクル（*Japan Chronicle*）』の 1922 年 11 月 5 日付記事の切り抜きがあり、『キモノ』のヤエがブリンクリーの娘を指すのは自明であり、訴訟を準備と報じている。ただ、訴訟は見送られたようだ。その後、情報局第二課勤務の佐々穆が報告書を提出しており、それによれば、佐々が英国大使館の知人に問い合わせた結果、『キモノ』のスミスが稲を指すのは、英国人社会のあいだでほぼ公然の秘密であるが、『キモノ』の作者が匿名であるため、訴訟は困難だろうと結論しており、その後の続報が見られないからである。おそらく日本政府は、作者がガトキンであったことを察知していたと思われるが、稲にそれを教示し、訴訟を起こすことは望んでいなかったと思われる。

むしろ日本政府側の本音は、おそらく外務省情報部の森権吉がもらした言葉であろう、前述の読売新聞の見出しにもある「活動写真になったら大変だ」という懸念であったかと思われる。実際、日本政府は映画化の阻止をガトキンに働きかけている。ガトキン自身も回顧するように、林権助から直々に、日本政府は強い抗議こそしないものの、映画化の権利を手放さないよう約束することを求められたらしい[24]。早川雪洲主演の米国映画『チート』（1915）が国辱映画として騒がれたことを筆頭に、当時の日本は、アメリカでの反日的な映画描写に神経をとがらせていた。内容からいっても、米国で映画になってもおかしくない内容であり、一つの傍証を挙げれば、本学が所蔵する 1922 年のコリンズ社による第 14 版は、映画会社のＭＧＭの図書室の旧蔵で、蔵書印によれば 1928 年 5 月 22 日に購入とある。ＭＧＭが企画したかどうかは不明であるが、なんらかの形で映画化の企画が進行した可能性はあるだろう。いずれにせよ、ガトキンは具体的に映画化を断ったと記してはいないが、たしかに手放すことはなく、いまのところ『キモノ』は映画化されていない。ただし、すべて『キモノ』のせいとはいえないまでも、小説がベストセラーになったことにより、ヨシワラという単語が世界中に広まったことは、その副作用として注記してよいだろう。たとえば、フリッツ・ラングの映画『メトロポリス』（1927）に描かれるクラブ名がヨシワラであるのは 1923 年のドイツ語訳の影響が考えられようし、イーヴリン・ウォーの『卑しい肉体（*Vile Bodies*）』（1930）に登場する高級娼婦の日本人女性がヨシワラ男爵夫人なのもおそらくは『キモノ』の影響で

23）カズンズについては、拙稿「アイルランド神智学徒のアジア主義？　ジェイムズ・カズンズの日本滞在（1919-1920）とその余波」藤田治彦『アジアをめぐる比較芸術・デザイン学研究――日英間に広がる 21 世紀の地平――』頭脳循環を活性化する若手研究者海外派遣プログラム報告書（2013）を参照。

24）Ashton=Gwatkin, ‘The Life and Times of John Paris’, p. 13.

はないだろうか。そのせいだろう、『キモノ』により、あたかも日本人女性があたかもみな吉原の犠牲者であるかのような印象を与えていることを危惧した外務省文化事業部が、助成で「日本の女性」という冊子を作って世界に頒布し、日本女性の進歩的な活躍をアルバムにして紹介したという逸話まで伝わっている[25)]。

同様に興味深いのは、『キモノ』の日本での受容である。最初にまとまった書評を発表したのは作家の正宗白鳥であった。白鳥は、1923年に翻訳が刊行される前に原書で読んでおり、詳細に内容を紹介しつつ、「低級な通俗小説」だが「一読を値する書物」として、「『キモノ』を読んで」（1922）という一文を執筆している[26)]。「長崎の裸踊り、吉原の花魁道中、紅葉館の宴会、日光鎌倉と、外人の喜びそうな日本の標本的名所名物」が章ごとに並ぶ姿は圧巻であり、その詳細なことは、ラフカディオ・ハーンやピエール・ロティを凌駕するほどだが、基本的に「劣等国民の風俗習慣を嗤って」おり、先行する日本趣味の作家と異なり、そこに「面白味を認めてはいない」ことを注記している。では何のためにここまで詳しく描かれているのか。白鳥は、「こんな卑しい国民が世界へ乗り出して勢力を張ろうとするのはゆるすべからざることと外国の読者が浅薄な道徳心を刺激されて喜ぶのであろう」と、とりわけ第一次世界大戦後、存在感を増した日本への反感という土壌があってのことではないかと推察している。書評執筆時、『キモノ』の作者の詳細はほぼ不明であり、現役の外務官僚であることが知れ渡るのは後のことである。したがって白鳥は、潜在的な反日感情が刺激され、喜ぶであろう読者の方に注目していることになる。事実、白鳥の推察はまさに作者の意図であったといって差し支えないだろう。ただし、「人種間の心の溝は深い」と、まさにガトキンも同意したであろう日英の差異を繰り返しつつ、そこから『キモノ』にみる誤解そのものより、「日本の作家が欧米人の生活を題材として、これだけ詳しい写実小説を書き上げたことはまだ一度もない」ことに白鳥は注意を喚起する。むしろ他山の石と見なそうという態度は、ほかの書評にもしばしば見られた特徴であった。とりわけ、廃娼運動などで『キモノ』を援用しようとした動きはいくつかあり、高良とみの「日本の女と『キモノ』」はその最たるものであろう[27)]。ほかにも賀川豊彦は、

> ジョン・パリスの小説『きもの』を読んで私は実によく書けた小説だと感心した。なるほど、日本人をあれほど悪罵すれば痛快であらう。白人から見て、黄色人種はあゝも見えるであらうと私は考へた。もしも日米間の問題が永遠の問題であるとすれば『きもの』

25）スメラ学塾編『スメラ学塾講座』（スメラ学塾、1940）所収の市河彦太郎「対外文化事業に就いて」p. 234。刊行当時、市河は外務省文化事業第二課長であった。
26）『正宗白鳥全集』22巻（福武書店、1986）、p. 92.
27）『高良とみの生と著作』第二巻（ドメス出版、2002）。白鳥の書評に教えられたことが記されていることから同時代かと思われるが、初出誌は不明。

図6　京文社による1924年4月10日付け読売新聞掲載の『きもの』広告

に現れた排日気分が、その根本的動機だと私は考へた。私はあの中に現れた恋愛などには少しも感心しなかつた。娘の性恪などは少しも描かれてゐない。それで私は恋愛小説として読まないで、日本批評としてあれを読んでみた。折々は日本の悪口を聞く必要もあらう[28]。

と記し、後にガトキン本人に面会した際に、「日本も、いつまでも子供じゃあるまいし、賞賛ばかり受けないで、ちっと真面目な批評を受けるべき、何時も賞賛ばかりでは成長することが出来ないではないか！」と冗談交じりにたしなめられたことを記している[29]。こうした受容はガトキンも欣快に耐えなかったようで、「賀川は私の本を認めてくれて、ちょうど吉原の奴隷制についてはキャンペーンを行っていたので、『キモノ』は武器として使える情報が多々ある」と述べたという[30]。それはまた京文社による『キモノ』の広告にもよく現れている（図6）。救世軍の山室軍平や作家で慶應大学教授の佐々木邦、それに三田元道女校長などの推薦の辞を挙げて、暴露趣味や排日というよりも外からの忠告として、虐げられた日

28)『賀川豊彦全集』22巻（キリスト新聞社、1974）所収『暗中隻語』(1926)、p. 109.
29)『賀川豊彦全集』23巻（キリスト新聞社、1974）所収『世界雲水遍路』p. 71.
30) Ashton=Gwatkin, 'The Life and Times of John Paris', p. 14.

本人女性の窮乏を知り、その向上のための啓発として読むべきだというのである。もちろんそれは大義名分に過ぎないが、日本で発禁されたという文句を捏造することで人目をひこうとしたアメリカの広告とともに、販売促進のための対照的な例としては比較できるだろう。いずれにせよ、正宗白鳥が示唆したように、日本と英国というのはかけ離れた存在であるにもかかわらず、その日本をこれだけ詳しく書いたガトキンの筆力と調査能力は、評価されてしかるべきものといえる。その白鳥は後に洋行したものの、それを生かした外国を舞台にした小説はあいにく発表していない。賀川豊彦の『死線を越えて』（1920）が英訳などにより世界で話題になったことが示唆するように、賛否両論があるとはいえ、これだけ異国に入り込み、その社会風俗を描いた小説はたしかに日本ではまだ刊行されていなかったのである。

おわりに

このようにガトキンの『キモノ』は、十分な時間をかけて盛り込まれた日本研究の記述と、用意周到ともいえる時期に刊行されたプロパガンダ小説である。コンラッドやクリフォードなど従来の東洋趣味的な要素を盛り込みつつ、ヴィクトリア朝的な日本趣味を覆す仕掛けがいたるところに工夫をこらされており、それが時事的な話題にとどまることなく、ペンギン・ブックスにまで収録された一因であろう。宣伝についても、傍証でしかないとはいえ、時期的にも皇太子の訪英を多分に意識した出版となっており、ガトキンの持論である日英同盟の廃棄と、日本の帝国主義への警戒を一般英国民に知らしめるには十分だったと考えられる。もちろん、日英同盟廃棄に影響したとまでいうことはできないが、そのことが意図された出版であることは注意されてよいだろう。おそらく皇太子訪英団の一員は『キモノ』が渡英時期に出版されていることに気づいていたかと思われるが、その抗議などを示すような文書は、目下のところ、英国の外交文書には見当たらない。日本政府の公式文書に登場するのは、アメリカ版が日本で発禁処分にあったという惹句を掲載した広告が現れて以降のことである。「混血児」ヤエのモデルとして中傷にも近い描写をされた稲・ブリンクリーは訴訟しようとしたが、匿名の壁と日本政府の無関心にはばまれて、泣き寝入りを余儀なくされた。政府の関心は、映画化の阻止にあったからだが、幸いそれは功を奏したものの、ヨシワラの名は小説の世界的なヒットにより、広く知れ渡り、その後の小説や映画に登場することとなる。むろん、直接的な証拠はみられないものの、以降、外務省は積極的に日本女性の活躍を喧伝しようと努めたと考えられる。一方、日本では『キモノ』が比較的性格に日本や日本人を蔑視した記述が翻訳されていたにもかかわらず、感情的な反発を示す書評はむしろ少なく、吉原の暗黒面への抗議を廃娼運動などに援用する賀川豊彦のような試みまでが見られたのであった。

A British Diplomat's 'Yellow Peril' Novel: Ashton-Gwatkin's *Kimono* (1921) and the British Tour of the Japanese Crown Prince

Yorimitsu HASHIMOTO

The British diplomat Ashton-Gwatkin published the novel *Kimono* (1921) under the penname of John Paris. Based on his intelligence activities in Japan and later in Singapore (1913-1919), he vividly and extensively described the naked truth of Japan under its frilled and decorated 'kimono': the harsh system of public prostitution in Yoshiwara behind the smile of gorgeous geisha girls and the ambitious expansionism toward Asia of Japanese gentlemen under the cover of the Anglo-Japanese alliance. The plot focuses on the 'living symbols' of the Anglo-Japanese alliance, a pair of a British noble, Geoffrey, and a Japanese girl, Asako, raised and educated in Europe. In spite of her lack of knowledge of Japan or the language, she feels her nature calls her as an 'Oriental', during their honeymoon in Egypt. Persuaded by her, the couple travel around Japan and are deeply shocked by what they see: in particular, a frenzied and licentious 'Eurasian' girl (modelled on Ine Brinkley, daughter of an English newspaper proprietor working as a Japanese government organ), which makes them realise that their marriage would be a contradictory conflicting mixture. The novel suggests that the marriage is a plot and propaganda planned by a Japanese politician with the support of an owner of a public brothel. It can be assumed that the British noble would be killed in the First World War and the estate and ladyship would be inherited by his Japanese wife.

The novel nearly repeats Ashton-Gwatkin's confidential reports to the foreign office about Japan's colonialism in Manchuria and acts of suppression to the Korean independence movement, in which he warned of Japan's ambition and atrocities varnished with 'Bushido propaganda'. Like a colonial Victorian dark fantasy of Joseph Conrad and Hugh Clifford, *Kimono* emphasises the dismal result of British civilisation in the non-Western world, scratching the civilised Japanese and revealing their 'true' colours. This traditional element of British Orientalism literature might explain why Conrad met Ashton-Gwatkin and praised *Kimono*. Although it is nearly forgotten now, it was the bestselling 'yellow peril' novel in the 1920s and was translated into nine languages, later being republished by Penguin Books in 1947.

Kimono was plump counter-propaganda opposed to Japan's 'Bushido propaganda', especially the British tour of the Japanese Crown Prince (Hirohito) to strengthen ties before diplomatic discussions concerning the extension of the Anglo-Japanese alliance. Ashton-Gwatkin had completed the novel in 1919 and in 1921 was waiting for the best timing to put it out when the argument of the revision of the alliance came up for discussion. The Japanese government's notice of the royal visit was officially reported to the British government in February, 1921 and *Kimono* was published in May, exactly as the Crown Prince was travelling around Britain and Ashton-Gwatkin was serving and supporting him. It is hardly surprising that a number of reviews of the work appeared in May and the alliance was cancelled. Even if this was not a direct result of *Kimono*, it was officially decided at Washington Naval Conference in 1922 at which Ashton-Gwatkin was in attendance as a member of the envoy. During the Prince's visit, *Kimono* would drew the attention of the mission. Most eye-catching is the jacket image of the Japanese calligraphy for 'the Anglo-Japanese alliance is heaven's will', written by the Governor-General of Korea. There seem to be no British or Japanese documents recording Japanese governmental protests against the publication and the timing, but the sarcastic novel seemed became known to Japanese officials.

The first official Japanese document about *Kimono* dates from 1922, just after an American publisher's fraudulent advertisement claiming that the novel was banned in Japan. Nervous about anti-Japanese (-immigrant) sentiment in the United States, the government worried that a film of the work would be made in America. For this reason, Ashton-Gwatkin was unofficially asked to keep the rights by a Japanese high official. Although the movie was prevented, the name of Yoshiwara became globally popular through Fritz Lang's movie *Metropolis* (1927) and Evelyn Waugh's novel *Vile Bodies* (1930), possibly inspired by the popularity of *Kimono*.

Meanwhile the Japanese translation was far from suppressed: a number of copies were sold and reprinted. The translation was nearly accurate and ruthless criticism, including misunderstandings, was not omitted. The publisher, with the recommendation of the Salvation Army and abolitionists of prostitution, appealed to the reader to take the work's warnings as an admonition. Another reviewer, Toyohiko Kagawa, who had met Ashton-Gwatkin in Britain, for instance, also followed the same pattern; however, only a few reviewers criticised *Kimono* as being an instance of the genre of the 'yellow peril'.